

提案を読んで

木 田 宏

(日本学術振興会理事長)

都市という生活空間が、留まるところなく拡がろうとしている。空間的に拡がるばかりではなく、そこで営まれる社会生活の諸機能が、密度を高め、重層化していく。その一方で、都市の内部が、腐敗し、空洞化し、或いは老朽化して、朽ちていく。都市は、放置しておく、癌細胞のごとく増殖し、その挙句崩壊していくのかもしれない。その意味において、医学における癌研究のような対応が、都市研究についても、緊急にとられなければならないまい。

それにしても、大学における都市研究の遅れは、どうしたことであろうか。本報告を読んで、最も強く考えさせられるのは、この大学の体質である。

大学は、学問研究の場として、人間と社会の様々な課題に取組み、その解決に資する努力を払ってきた筈である。事実、自然の理法や因果の関係を明らかにして、科学技術の発達をもたらし、今日の繁栄をもたらす原動力となって来た。しかし、今日わが国の大学が、今日のわれわれがかかえる問題に、どの程度、真剣な対応を行っているであろうか。

ここに報告された都市総合研究の提案と、都市教育の現状についての補論を見ると、大学関係者が真剣にこの提案に応えられんことを願わずにはおれない。それは都市の活性化を願うからであり、また、大学自体の活性化を希求するからである。

癌への対応が、多角的、総合的に行われなければならないごとく、都市への対応も、多角的な研究教育の体制を必要とするであろう。その見地からは、学部教育において、どこまでの対応が期待できるかは、いささか疑問を抱かざるをえない。学部教育の段階では、どうしても基礎的なものへの対応が基本にならざるをえないと考えるからである。

最後に、この提案が現実化していくためには、理事者側の理解と積極的

な対応が必要である。大学の教育研究を動かすものは、大学の教員自身ではあるが、彼等をして、現実の対応を取らせうるのは、大学の教育研究を支える当局者に外ならないからである。

新しい必要に応じて、新たな対応をすすめる積極的な態度を、当局者にも研究者にも、強く訴えたいところである。